

戸隠流：戸隠のユニークな忍者の流派

日本の忍者が使う術である「忍術」の起源は、千年以上も昔に遡ります。そして戸隠独自の流派である「戸隠流」は、忍術が生まれてすぐに始まったとされています。

忍術は、仏教、道教、そして日本の神道などの様々な宗教で構成された山岳信仰の一つの形である修験道の実践から発展したとされています。修験道は、開祖である役小角（634年？～701年）によって、678年ごろ戸隠で行われるようになりました。役小角は悟りへの道として、身体の頑強さを重要と考えていました。修験道の訓練には、断食、隠遁生活、そして山から流れ落ちる凍えるような滝の下で長時間立つといった、ストイックに身体を鍛える修行が含まれていました。そして初期の忍術の技術は、こうした修行から生まれたと言われているのです。

信濃（現在の長野県）の信濃一族は、平安時代（794年～1185年）に軍を訓練するために、修験道の技術を採用しました。これらの技術は後に近江（現在の滋賀県）の甲賀と伊賀地方で忍術へと発展し、甲賀流、伊賀流の派生へと繋がったのです。12世紀、武士の仁科大助は霞隠道士という僧侶から伊賀流の忍術を学び、戸隠流の発祥の地である戸隠にこれらの忍術を持ち込んだとされています。ここで伊賀流の忍術は武士の訓練の技術と混ざり合い、やがて戸隠流忍術の学校へと発展したのです。

戸隠流忍術の特徴

戸隠流は他の忍術の流派とは異なり、敵の攻撃に対する防御に重点を置いています。隠密状態で敵の中に潜入して情報を収集することは戸隠流の戦術の1つであり、また武器なしで敵を倒すことが、戸隠忍者の証だったのです。とはいえ、戸隠流では手裏剣などの武器も使用されていました。戸隠流特有の手裏剣に「銛盤」がありました。この銛盤はひし形をした小さな武器で中央に穴があり、敵地で釘を取り除いたりすることに使用することができます。

戸隠流の修行には、1日120～150kmを歩いたり、木製の下駄を履いて氷の上を歩いたり、水の入ったバケツをかけた竿を担いで長時間運んだり、木を登る修行などがありました。また、肉体の修練に加えて、戸隠流の忍者は天文学、数学、医学の勉強も求められたのです。

戸隠流の現在

戸隠流について知られていることの多くは、戸隠流忍法資料館に展示されています。展示品の中には、忍者の武器、衣服、潜入に使われる道具、忍術の様子を描いた巻物などがあります。また戸隠流忍法資料館の隣には「忍者からくり屋敷」があります。この忍者からくり屋敷は秘密の出入り口と通路だらけの建物で、訪問者はそれらを探索することができます。そして近くには手裏剣の道場もあり、忍者の象徴的な武器である手裏剣を実際に投げることができます。